



## 水素エネルギー協会事務局の感慨

水素エネルギー協会事務局長

横浜国立大学教育人間科学部 谷生重晴

2005年3月、ようやく木々が芽吹き始めたワシントンで私はエネルギー省（DOE）長官 Samuel Bodman のスピーチを聴いていた。アメリカ水素協会（NHA）年会会場のホテル玄関前に作られた仮設演台には、水素エネルギー経済推進の立役者たちが居並び、100人ほどの聴衆を前に Bodman が彼らを褒め称えていたのである。彼らは誇らしげに、自信を持って賞賛を受けていた。

彼らのその態度から、記憶は、2003年5月 DOE の Hydrogen & Fuel Cells Program Meeting に出席したときに感じた「アメリカの迫力」を思い出させた。パークレーで開かれたこのミーティングは、1月にブッシュ大統領が「アメリカが水素自動車のリーダーになるために12億ドル（約1,300億円）の研究費を提供する」と発表した直後であったから、さぞやケネディーがアポロ計画で月に人類を送ることを宣言したときの研究者たちの興奮はこのようなものであったろう、と思わせるような熱気に包まれていた。それは、多くの発表者たちの報告が、前年のように日本などを引き合いに出して気を引こうとするのではなく、無理ではないかと思うほどの高い数値目標と速い達成期限を具体的に示すことで彼らのテーマの可能性を熱くアピールすることに現れていた。私は、燃料電池研究やバイオ水素研究で日本はアメリカより進んでいると自信を持っているが、かれらのあの勢いで研究が進めば、5年後（2008年）には日本は追い越されるかもしれないと不安を感じたのであった。

NHA は HESS（水素エネルギー協会）と規模はそれほど変わらない（団体会員数、HESS 約60社、NHA 約70社）小さい団体である。にもかかわらず、その年に大国の大臣を招待し、それに応えて大臣が政策の効力を高めるべく関係者を鼓舞する。このようなアメリカの文化スタイルを日本に望むことは難しいが、これは多くの人達のエネルギーを、一つの方向に注ぎ込む非常に有効な方法であることは間違いない。同時に、アメリカが本気で日本を追い抜こうと考えている証拠でもある。

今 HESS は、WHEC15、FC EXPO の成功と水素社会到来の兆しを受けて、これまでに大きく発展している。また会員には産官学の水素社会推進のブレーンが多数見られる。しかし、HESS の活動はどちらかと言えば受動的、学問的で、社会に直接提言するほどの能動的、政策的ではない。それは、NHA とは異なって、会長、事務局ともボランティアだからである。とりわけ事務局がボランティアで運営されているのが、活力に欠けるもっとも大きな要因であることは間違いない。理事会、編集委員会、評議員会などでは非常に良い企画、意見が出ているが、それらを実行に移すには事務局がそのために時間を提供しなければならない。しかし、ボランティアではどうしても時間が足りず、実行できない悔しい思いを私はこれまで幾度も経験している。

学問的であると同時に、水素社会推進のリーダーとして、能動的、政策的な力強い HESS になるために、また日本がアメリカに追い抜かれぬために、そろそろ専任の事務局長を置く必要があるのではなかろうか。Bodman 長官のスピーチを聴きながら強く感じた次第であった。